

平成28年度 政務活動報告書

会派又は議員名 清風

政務活動期間	平成28年5月15日～5月17日(3日間)
政務活動先	群馬県桐生市、長野県長野市・白馬村・北相木村
政務活動参加者	稲村勝俊、岡野喜代治、古谷陽一(清風) 山田 明、佐藤 立、山崎公司(新風)(6名)
政務活動項目	桐生中央商店街とNPO キッズバレイによる子育て支援と商店街活性化について リノベーションのまちについて(善光寺門前町) 白馬高校魅力化プロジェクト(白馬村) 山村留学および民間塾との連携による教育魅力化について(北相木村)
政務活動項目に係る 目的・結果等の概要・所見	別紙のとおり

「割り切り」が生み出す新たな動き

群馬県桐生中央商店街と NPO キッズバレイによる子育て支援と商店街活性化

ここがポイント!!

▽ 商店街理事長就任の条件として、**全理事を世代交代**

▽ 活性化策では**既存商店の売上増は目指さない**

織維で栄えた街・桐生

桐生市は、東京から鉄道で1時間40分程度の群馬県南東部にあります。昭和20年代から30年代を頂点に織維産業で栄えました。その後昭和50年代までは賑わいが続きましたが、織維に変わって基幹産業となる産業が現れず現在は県内で人口減少率が最も高い自治体になっています。

この桐生市の中心部にある桐生中央商店街にNPO キッズバレイが運営するコワーキング

2010年に茂木さん(当時44歳)が理事長に就任した際、就任の条件として全ての理事が世代交代することをあげました。これにより、30、40歳代の理事により商店街の運営が行われることとなりました。

商店街振興組合(理事長「当時」茂木敏さん)の特長は組織の世代交代に成功していることです。

多くの商店街が抱える課題の一つが世代交代です。活性化に若手の力が



キッズバレイ代表の赤石さんと商店街理事長の模擬さん

世代交代は力づくで

NPO キッズバレイと二人三脚で商店街活性化に取り組んでいる桐生中央

必要とは分かっていながら、組織の意思決定の世で、現在の柔軟な活動に繋がっています。を十分に発揮できない

世代で、特に女性を主な対象としています。また飲食店の新規開業により、市内の大学生など若者の来街も増えつつあります。しかしこれらの来街者は既存商店の顧客層とは異なるため、直接売上増につながるわけではない

もう1つの特長は、商店街活性化の取組が既存商店の売上げ増に繋がる

商店街の既存商店は従来からの顧客を掴んでいます。その既存顧客層を拡大することにはあえて取り組まないで、新たな来街者のための新たな店舗ができれば良いと考えています。この背景には、良い品物には出費を惜しまない「桐生着道楽」と言われる独特の文化によって既存商店が支えられているという点を見落とせません。



商店街活性化というと、来街者を増やして既存店舗の売上増につなげるというのが一般的な目



親子のイベントで作ったレゴの桐生

標です。しかし、商店街の衰退は近隣住民等の顧客ニーズに既存店舗が応えきれないことが大きな要因です。小規模小売店が多い商店街既存店舗が、従来のスタイルを変えて現在の顧客ニーズに合わせるの用意ではありません。また、長年の顧客を失うことにもつながりかねません。それは、店舗にとってはもちろん、これまでの顧客にとっても望ましいことではありません。



女性が多く集う COCOTOMO 店内

そこで、いまの顧客ニーズにえられる新たな店舗を商店街に迎え入れれば良い、と発想を転換したのです。顧客ニーズは時代によって変化します。その変化を受け入れ、個々の店舗の入れ替わりをも許容することで、商店街全体の活気を保つという考え方です。

○研修日時
平成28年5月15日(日) 14時~16時
○研修先
桐生中央商店街(理事長 茂木敏様)
NPO法人キッズバレイ(代表理事 赤石麻美様)
○参加者
会派清風(稲村勝俊・岡野喜代治・古谷陽一)
会派新風(山田明・山崎公司・佐藤立)



長野市善光寺門前町 リノベーションのまち

ここがポイント!!

- ▽ 「まちづくり」＝「新しいことをする」からの脱却
- ▽ 地元密着・地元向けの情報発信
- ▽ 移住希望者とはじっくり時間をかけて

門前町ですすむ空洞化

長野市は長野県の県庁所在地で人口はおよそ37万人、古くから善光寺の門前町として栄え、いまも長野県北部の観光の拠点です。1998年には長野オリンピック・パラリンピックも開催されました。善光寺の門前帯はまた、古民家や商店を改装したカフェやアトリエ、ギャラリー、オフィスなどが入居するリノベーションの街としても注目されています。

善光寺門前町も他の多くの地方都市と同じく、高齢化・人口減少・空き地の増加といった課題を抱えています。昭和30年代には約17,000人いた人口が平成22年には6,600人まで減少しました。人口減少比べて世帯数の減少が少ないことから、1世帯あたりの人数が減少していることが特徴です。また高齢化もすすんでいることから高齢者のみの世帯や独居世帯が増加していると考えられます。

信州大学教育 学部の存在

善光寺の近くには信州大学教育学部があり、2



年生から4年生のおよそ750名が学んでいます。信州大学は国立大学のなかでも県外出身者の割合が多いことで知ら

れています。特に教育学部は、文系・理系・体育・芸術など幅広い専攻を持ち、とりわけ多様な学生が在籍しています。この多様な若者・よそ者の存在がこの地域に与える影響は軽視できません。リノベーションの動きの一つの核となっているナノグラフィカもこの信州大学教育学部の卒業生が立ち上げました。

新しいことをしない

「まちづくり」といって、なにか新しい仕掛けをすることに目が行きがちです。しかし、0からつくりあげるのは負担が大きく継続して活動することも困難です。多くの

地域で、一時的なイベントや補助金頼みの事業となったり一部の方に負担が集中したりという課題が起こっています。

一方、それぞれの地域



古民家をリノベーションしたゲストハウス 世界中から観光客が訪れる

よそ者・若者がした

信州大学教育学部には学中から門前町にあるライブハウスにかかわっていた増澤珠美さんが卒業後にカフェギャラリー「ナノグラフィカ」を立ち上げました。みんなが楽しみながら暮らしたら門前町はもっと元気なるのでは、という考えからです。

には「昔からあるから」当たり前だから」といって特に注目されていない多くの事があります。その当たり前にあるものに普段とは違った角度から光をあてることで新たな価値を見出すことができます。暮らしている人々が、何か特別のこをする必要はない。ただ、その見せ方を工夫する。この発想を基礎として、関係者の連動により生まれたのが善光寺門前町・リノベーションの町です。



古民家をリノベーションしたパン屋

伝統があり高齢化が進んでいる町でよそ者である増澤さんが重視したのは、地域住民とのコミュニケーションです。活動当初は「門前通信」という手書きの新聞を毎週発行し、周辺地区に配布しました。また地元の区長との交流も欠かさず、活動に対するアンケートも行うなど地道な取組を続けて地域の理解と協力を得ていったのです。

地元密着の情報発信 時間を掛けた移住

門前通信のほかに門前町を自分なりの感性で切り取った「街並み」というミニ冊子を制作しました。これも地元の方へのメッセージでした。地域の魅力や価値を「逆輸入的に」地元へ向けて発信したのです。

移住促進・交流人口の増加という外向きの情報発信が中心になりがちです。それ自体は重要なことですが、地域の魅力を伝える根幹は住民が自らの街を誇りに思い、楽しく暮らしていることではないでしょうか。そのため、住民が自らの地域のことをよく知り、価値を認めることが第一歩です。ナノグラフィカが手がけてきたミクロな地元向けの発信から始めることの意義はここにあります。

また見学会参加者は、移住しなくても門前町の魅力を発信してくれる大切なファンになります。

○研修日時
平成28年5月16日(月) 9時～11時

○研修先
ナノグラフィカ(代表増澤珠美様)

○参加者
会派清風(稲村勝俊・岡野喜代治・古谷陽一)
会派新風(山田明・山崎公司・佐藤立)



ここがポイント!!

- ・専任担当者を置くことで推進力が生まれる
- ・首長はぶれてはいけない

世界的な観光地で進む少子化

長野県北部の白馬村は、1998年に開催された長野オリンピックの競技会場として知られています。近年は、アジア屈指のウィンタースポーツとして、オーストラリア・シンガポール・マレーシア等から多くの観光客が訪れています。人口9000人強の白馬村ですが、冬には500名以上の外国人が住民登録する国際色豊かな村です。

この白馬高校に、白馬高校魅力化プロジェクトの一環として平成28年4月に国際観光科が新設されました。子供の減少に伴い統廃合の基準を下げた白馬高校を存続させるために、島根県立隠岐島前高校の魅力化プロジェクトをモデルにしたプロジェクトです。

28年4月、国際観光科に1期生38名、普通科にも38名が入学し生徒数は再編基準を上回る188名となりました。白馬高校魅力化プロジェクトは初年度から大きな成果を上げていますが、



専任担当者を配置

白馬高校の存続は村の長年の課題でした。平成5年には関係者による懇話会が設置されましたが、具体的な進展はなく、平成26年の村長選挙で高校魅力化を公約に掲げた村長が誕生し、現在の高校魅力化プロジェクトが具体的に動き始めました。高校魅力化の担当を教育委員会から村長部局(総務課)に移し担当係員2名を配置したことで事業の推進力が高まりました。

村民の多くは高校存続に危機感を感じていない

ため、広報誌で毎月高校魅力化プロジェクトについて情報発信をしたほか、白馬村・小谷村の全世帯に折込広告を配布して問題意識の喚起に努めたそうです。高校側は、管理職がやる気になり協力

得ることができました。また、小谷村の予算を利用して、島前高校魅力化プロジェクト教育ディレクターの藤岡慎二氏を外部アドバイザーとして招聘しました。

現在入寮しているのは男子のみで女子は村内に下宿しています。入寮者の出身地は、鳥取、福岡、愛知、東京、千葉などで長野県内も南部から3名入寮していますが、女子は現在下宿ですが、寮の共同生活の教育効果を考えて、新たに女子寮を整備する方向で検討しています。

また、小谷村の予算を利用して、島前高校魅力化プロジェクト教育ディレクターの藤岡慎二氏を外部アドバイザーとして招聘しました。

タッフの任期が切れる3年後にスタッフを単費で継続雇用するのか、地域おこし協力隊の制度を使うために新たなスタッフに入れ替えるのか。今後魅力化プロジェクトを継続していく上で大きな課題となっています。また、公営塾スタッフがより機動的に活動できるように、地域おこし協力隊の制度設計も再検討の余地があるそうです。

教育に限らず長期間の取組が必要なプロジェクトに大して行政がどのように取り組むか、首長・議会がどう望むかは白馬村に限らない大きな課題です。

観光を切り口にした魅力化へ

白馬高校はオリンピック選手を多く輩出しているスキー部が全国的に有名でしたが生徒獲得にはつながっていませんでした。そこで、白馬高校を育てる懇話会の議論を踏まえ、白馬村が国際的な観光地であることを活かして国際観光という新しい切り口を設けることとしました。こうして国際

観光科の新設と全国募集・公営塾しろうま学舎と教育寮の設置という白馬高校魅力化プロジェクトがスタートしました。

○教育寮

廃業した民宿を村が買い取り遠隔地から白馬高校に入学する生徒のための教育寮に改装しました。管理人夫婦が住み込みで日常生活の世話をしています。



○しろうま学舎(公営塾)

白馬村と小谷村の共同運営で設置した公営塾「しろうま学舎」5月現在48名の生徒が通い、高校と連携して学習支援・コミュニケーション力の訓練や進学のための志望理由書の作成支援を行っています。運営スタッフは3名ですべて地域おこし協力隊を利用しています。授業形態は個別指導十自立型学習十ゼミ形式で、基本的に自分で問題演習を行い疑問点をスタッフに確認するスタイルです。

廃業した民宿を村が買い取り遠隔地から白馬高校に入学する生徒のための教育寮に改装しました。管理人夫婦が住み込みで日常生活の世話をしています。

廃業した民宿を村が買い取り遠隔地から白馬高校に入学する生徒のための教育寮に改装しました。管理人夫婦が住み込みで日常生活の世話をしています。

廃業した民宿を村が買い取り遠隔地から白馬高校に入学する生徒のための教育寮に改装しました。管理人夫婦が住み込みで日常生活の世話をしています。

廃業した民宿を村が買い取り遠隔地から白馬高校に入学する生徒のための教育寮に改装しました。管理人夫婦が住み込みで日常生活の世話をしています。



廃業した民宿を村が買い取り遠隔地から白馬高校に入学する生徒のための教育寮に改装しました。管理人夫婦が住み込みで日常生活の世話をしています。

廃業した民宿を村が買い取り遠隔地から白馬高校に入学する生徒のための教育寮に改装しました。管理人夫婦が住み込みで日常生活の世話をしています。

廃業した民宿を村が買い取り遠隔地から白馬高校に入学する生徒のための教育寮に改装しました。管理人夫婦が住み込みで日常生活の世話をしています。

高校魅力化の課題

白馬高校魅力化プロジェクトの現時点での課題は財政面です。地域おこし協力隊の制度を利用していますが、現在のス

首長はぶれないこと

もう一つのより根本的な課題として、村として今後白馬高校魅力化にどのように取り組んでいくのかという問題があります。高校魅力化は村長の公約だったためこれまで、迅速に事業が進んできました。しかし、実際にプロジェクトが始まることで、教育寮の整備を含め様々な財政負担が明らかになり、推進力に陰りがみえつつあります。高校魅力化に関する村長の発言が若干トーンダウンしていることも影響しているようです。

教育に限らず長期間の取組が必要なプロジェクトに大して行政がどのように取り組むか、首長・議会がどう望むかは白馬村に限らない大きな課題です。

○研修日時

平成28年5月16日(月) 14時~17時

○研修先

白馬村役場(総務課 渡邊宏太様)

教育寮

公営塾しろうま学舎(塾長 奥田純子様)

○参加者

会派清風(稲村勝俊・岡野喜代治・古谷陽一)

会派新風(山田明・山崎公司・佐藤立)

制度は手段に任せる道 現場に任せる道 勇気が拓く道

長野県北相木村 山村留学および民間塾との連携による教育魅力化

ここがポイント!!

- 現場が本気になったら任せる勇気を。
- 制度は手段。どう使いこなすのかを工夫。

人口800人の山村に全国から集まる小学生

長野県中部、群馬県との県境に位置する南佐久郡北相木村は村のやく9割を山林が占める山間の村です。人口はおおよそ800人。昭和55年とくらべてすでに35%以上減少しており、高齢化率は平成20年に40%を超えました。村内に教育機関は小学校が1校しかありません。中学校はなく隣接する小海町に、小海町・南相木村とともに設立した小海町北相木村南相木村中学校組合立小海中学校があります。

まさに教育過疎と言えるこの村の北相木小学校

山村留学の失敗と転換

北相木村の山村留学は1987年から始まりました。導入の目的は、小学校の生徒数を確保して学校を存続させること

持のために必要不可欠でしたが、諸手を挙げて大歓迎とは言えないものでした。留学者には都会の学校になじめなかった困り感のある児童もいて、山村留学を引き受けたことによって学級崩壊につながったこともありました。

そして、全国的な児童数の減少の影響受け北相木村への留学希望者は減少し、全国団体が撤退し

山村留学は、小学校維



山村留学センターの居室（相部屋）

たため2010年には3人となります。これにより全児童数も28人となり村民から学校統合の陳情が提出され議会で採択

されるまでに至りました。そこで、村は民間塾「花まる学習会」との提携や山村留学の独自募集などに取り組み始めました。

花まる学習会と提携するも

花まる学習会は年中、小学6年生までを対象にし、「魅力的な人」「メンの食える大人」を目指す学習塾で、埼玉県を本拠地としています。

村では2011年度から花まる学習会と提携を

はじめました。月に1回花まる学習会の講師による授業が行われるほか、教員による花まる学習会のカリキュラムに基づいた指導も行われます。しかし、当初は形だけの導入にとどまっていた。

1人の教員が本気になった時 教育委員会がしたこと

2012年に着任した1人の若手教員によって、北相木小学校が変わり始めます。教育委員会の方針だから、現場は口出しできない。とりあえず取り組むだけ。という現状に疑問を感じ、花まる学習会の方法を学び公立小学校にどう取り込んで行くのか花まる学習会の講師・学校教員による勉強会を行うなど教員が主体

村は、この動きに何をしたのか。それは「何もしない」です。現場が本気になって動き始めたら、村・教育委員会は余計な口出しをせず、現場に委ねるという決断をしました。唯一したことは、出張旅費を含む教員の研修予算を確保したことでした。

留学希望者は1泊2日で村へ

いま、北相木小学校は山村留学希望者を選抜しています。留学希望者が3名にまで減り統廃合の危機に晒された小学校に何がおきたのか。花まる学習会のカリキュラムを取り入れた独自の学習スタイルを現場教員が主体的に作り上げたことは大きな要因です。しかし、



北相木小学校の授業 約半数は山村留學生

北相木小学校に山村留学する場合には、保護者とともに1泊2日村に滞在し体験入学をする必要があります。この場が事実上の入学選考になっています。また過去の山村留学の失敗を踏まえて、村の子どもたちの学年ごとの人数・性別を踏まえ、各学年男女何名ずつ山村留学で受け入れるかを決め、教育環境の維持に努めています。

山村留学は手段

北相木村の取り組みの根底にあるものは、村の存続のために小学校が必要という切実な事情です。当初必要悪的な位置付けであった山村留学を、駄目と否定するのではなく、どうすればうまく活用できるのかを徹底的に考えた1つのこたえが、花まる学習会との連携だったのです。

○研修日時

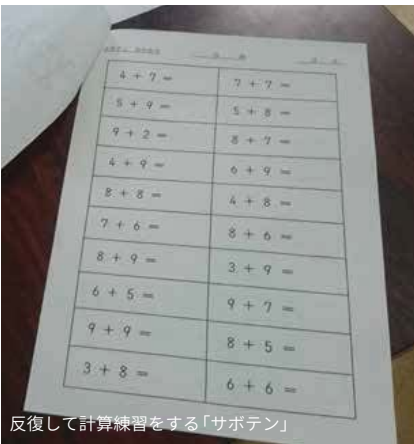
平成28年5月17日
(火) 9時～11時

○研修先

北相木村（井出高明村長・井出利秋教育長）
北相木小学校（中村雅司校長）

○参加者

会派清風（稲村勝俊・岡野喜代治・古谷陽一）
会派新風（山田明・山崎公司・佐藤立）



反復して計算練習をする「サボテン」

平成28年度 政務活動報告書

会派又は議員名 清風

政務活動期間	平成28年9月29日～10月1日(3日間)
政務活動先	宮城県仙台市、大崎市
政務活動参加者	石川和榮、五十嵐信子 後藤正洋(新風)、市川 正(清風)(4名)
政務活動項目	青葉まつりの運営と支援について 大崎市誕生10周年記念事業補助金交付事業について 子育て支援事業について 岩出山小学校現地視察について 岩出山有備館現地視察について
政務活動項目に係る 目的・結果等の概要・所見	別紙のとおり

平成 28 年度 政務活動報告書

清風 市川 正

政務活動期間 9月29日(木)～10月1日(土) 3日間

政務活動先 宮城県仙台市 ・ 大崎市

政務活動参加者 新風・後藤正洋 清風・市川 正
公明・石川和榮／五十嵐信子

政務活動項目

9/29

- ・仙台市議長表敬訪問
- ・仙台市研修～青葉まつり 行政と民間の役割分担について
～東北大学 岩出山藩当別移住古文書解析について
- ・瑞鳳殿視察

9/30

- ・大崎市議長、市長表敬訪問
- ・大崎市研修～10周年記念事業について
～子育て支援事業について
- ・岩出山教育委員会研修～岩出山小学校視察 防災教育について
- ・あ・ら・伊達な道の駅視察

10/1

- ・岩出山有備館視察

9/29(木) (11:50)

仙台市議会へ表敬訪問岡部議長・稲葉副市長・事務局の皆様より歓迎を受ける。
その後、文化観光局 観光交流部 観光課今井課長・鈴木主査から 青葉まつりの開催にあたっての 行政と民間の役割分担についての説明を受ける。

観光課の職員は10名で、課としては小さいようでしたが 通年四季折々のお祭り 仙台青葉まつり・仙台七夕まつり・定禅寺ストリート・ジャズ・フェスティバル in 仙台・みちのくよさこい祭り・ SENDAI 光のページェントと5つの大きなイベントを意欲的に開催されている模様を聞かせて下さる。

そこには、市民の方が声をあげ現在はJC出身の実行委員長、市のOBの事務局長、事務局職員3人を中心に熱くリーダーシップを取り資金集めにも努力されている。観光課長が副実行委員長・企画広報部会副部会長に就任し会議にも参加し応援しているとのこと。

すずめ踊りを踊る祭連の構成は、地域・職場・サークル仲間単位などで64団体が仙臺すずめ踊り連盟に加入。子供たちにも普及を図る為小学生を対象に、年間を通して踊り方の習得と祭り参加を目的に「すずめっ子クラブ」を発足させ活動。小学校4年生の宮城県版体育の教科書に踊り方を掲載。後継の育成にも力を入れていた。各祭連からの公募・選抜による「伊達の舞」チームも結成しPR活動も行われていた。皆が一つになって祭りを盛り上げ関わるひとたちが楽しんで作られていると感じられた。その波動が市民にも伝わり盛大なイベントとなっていることを学ばせていただきました。

(15:00)

東北大学へ 東北アジア研究センターの友田助教と面会し 岩出山藩当別文書解析について お話を伺う。

昔は、吾妻家のその家自体が庁舎のようなものであった為、公文書のようなものが8割程度であったとのこと。とても歴史上重要な文書であるが、目録が出来ていない為、現在友田助教を中心に整理・撮影作業を地道にしてくださっていることをお聞きする。

岩出山町史では 当別町へ入るまでのことが書かれている。当別町の開拓の歴史は、岩出山からの歴史も私達の歴史ととらえて学んでいく重要性など 意見交換をしました。

いずれは、当別町へ戻る重要かつ大切な資料ですが 「当別町にはしかるべき保管場所がない」「専門的に運用していける人がいない」との指摘を受ける。

その後 伊達政宗を祀る霊廟 瑞鳳殿視察。

9/30 (9:00)

大崎市 門間議長・伊藤市長表敬訪問

(10:00)

市政10周年記念事業について・子育て支援事業について研修を受ける。

大崎市は平成18年3月31日に1市6町が合併し今年10周年を迎える。

1市6町の合併という事もあり、風土も人も違いから住民間で「おらの町」という誇りから「住民自治はどうするのか？」との議論があった。合併以来「地域自治組織」を設立。職員が地道に関わりを持って「住民間の違いを認め合い協働に力を入れてきた10年だった」と語られる。とてもご苦労が多かったと思うが職員の誠実な関わりが感じられた。

記念事業の基本方針では、「市民との協働」で一体感の醸成を図り「大崎は一つ」の意識付け。新市名になったことにより「知名度が低く大崎市を広く周知する。市民と職員による協働を基本とし共に考え行動する姿勢を示すことを重点におかれていた。

また役割分担が重要であると話された。その中でも記念事業実行委員会のメンバーは、40歳未満限定とし広報誌で公募。市の職員も応募が出来る。また、地域自治組織より推薦も受け付け「平均年齢は32歳となりこのメンバーは10周年記念事業だけで終わらず、今後「町の人材」として育成していく狙いもあるとのことでした。

事業費 予算額 約90,000千円 (うち推進協議会約63,000千円)

大崎市誕生10周年記念事業補助金 交付対象事業

- 1) 一体感醸成事業～各地域間の交流及び相互理解の促進を行うことで市の一体感の醸成を図ることが出来ることを見込まれる事業。(50万円)
- 2) アピール事業 ～「宝の都(くに)・大崎」を市内外に発信することにより市を広く周知することが出来る事業。(100万円)

*H26/4 全国初 「話し合う協働の町づくり条例」施行

市民と行政が互いに知恵や情報を出し合い「ともに考え ともに話し合いながら ともにまちづくりを進めていくことを約束した市民生活に根差した身近な条例。

*この補助金を通じて「各団体に今後どうしていきたいのか?これをやるともともと良くなると話し合いを重ね 職員と地域との信頼関係を築いている。補助金頼りばかり考えていると、補助金がなければやらないということになる

恐れがある。地域に考える力が無くなる。この補助金を利用することにより各団体に考える力を与えて、行政依存を変えていきたいと話される。

どうしたら解決できるかを一緒に考えていくことにより クレーマーが変わってきているという。今までは会議や打ち合わせはするが、話し合いの文化がなかったので 話し合いに徹しているとのこと。

この10年間、合併したことに 今だ異議を唱える方もいらっしゃる中、合併を良い意味で埋めていく努力をされたとお聞きし、地道にお互いの違いを認め合い話し合いながら町を発展させている大崎市の取り組みは 本来の人としての心に寄り添ったものであるため 職員の努力が素直に市民に伝わっていったのだろうと感動しました。

引き続き、子育て支援事業について 民生部子育て支援課 鈴木課長より 子育て支援ガイドブックなどについての お話を聞かせていただく。ここでは 税金を使わずに 若干抵抗があったとの事でしたが、民間会社の広告料で作成をしておられた。ガイドブックは毎年変わる内容も掲載しているため これからはウェブ発信も大事になると話されていた。

その後 三本木子育て支援総合施設ひまわり園を視察。園内を佐々木園長に案内していただき説明を受ける。

平成20年度より 三本木幼稚園・三本木保育所・子育て支援センターが統合され総合施設「ひまわり園」として一体的な運営がスタートされたとの事。

事業費は 747,135千円 とても広々とした園舎で 園庭も遊具が充実しており簡易プールも常設。子供たちも元気いっぱいにあいさつをしてくれました。掲示されている絵も 明るくのびのびと描かれており 子ども達はここで楽しく過ごされているのではと感じられました。

(13:30)

岩出山教育委員会～岩出山小学校へ 学校教育課の佐藤課長より 防災教育について説明を受ける。

本校では、宮城県教育委員会より みやぎ防災教育推進協力校事業の指定を受け子ども達に確かな防災意識を身に付けさせるために「みやぎ防災教育副読本」の活用を通して、各教科、領域等における授業作りに取り組まれている。

副読本の歴史編では、岩出山で起こった災害を学び 現代編では岩出山地区で予測を必要とする災害など また、これまで以上に防災意識を高め自らの命を守る工夫も盛り込まれた内容になっており とても参考になりました。

(15:00)

あ・ら・伊達な道の駅へ 株式会社池月道の駅の遠藤社長の歓迎を受ける。商業店舗は、常に新しいものを考えていかなければいけない事。商品陳列も日々少しずつ変えていくことがとても大事な事。お客様は陳列一つとっても新鮮さに敏感であると教えていただく。

国の事業でパーキングを広くする計画があり、鎧兜、お姫様コスプレ体験・熱気球の飛行などの遊び体験も行う予定。H30年よりロイズロゴ入りアドバルーンをあげるとのことでした。道の駅が600万円で購入・広告宣伝費としてロイズより支払いあり。当別町の道の駅開業の時には出張しますよと話される。

伊達つながりで甲冑の販売や展示など行ってはどうかとの提案もして下さる。

10/1 (10:00)

岩出山有備館視察へ

岩出山古文書を読む会の菊地優子会長も同行して下さり「京都冷泉家と岩出山」の展示説明を受ける。

今年より古文書の整理を委託され一週間に二回作業に携わって下さっている。

岩出山から当別へ渡られたので当然のことだとは思いますが、岩出山の歴史が当別あったことに驚かれ、古文書の汚れを見ても苦心して運んだことが伺えたと話されていました。

整理したものは岩出山の方でも展示となるが、いずれ当別へ渡ることになるので 今後は、当別町で保管され 当別にこの歴史を任せたいとの事。箱ものなども検討して 展示することが大事だとのご意見をいただく。

当別町としても大切なこの歴史を後世へ受け継いでいくためには どのようにしていくことが一番良いか 心ひとつに検討して 検討していかなければならない時が近づいているとあらためて思った。

平成28年度 政務活動報告書

会派又は議員名 清風

政務活動期間	平成28年11月7日(1日間)
政務活動先	恵庭市、砂川市
政務活動参加者	稲村勝俊、岡野喜代治、市川 正、古谷陽一(清風) 山田 明、山崎公司、後藤正洋、佐藤 立(新風)(8名)
政務活動項目	理念に基づく幼児教育と遊びの意義について (学校法人リズム学園恵庭幼稚園) 地域おこし協力隊導入の経緯について (まちなか集客施設SUBACO)
政務活動項目に係る 目的・結果等の概要・所見	別紙のとおり

遊ぶが育む感性・主体性

理念に基づく幼児教育と遊びの意義

恵庭市 学校法人リズム学園恵庭幼稚園

「遊び」に反対したのは保護者だった

学校法人リズム学園恵庭幼稚園は恵庭市の中心部にある仏教系の私立幼稚園です。ここは「遊び」を重視した教育をする幼稚園として注目されていて、恵庭市内では有数の人気園です。また、恵庭幼稚園は恵庭市で一番古い私立幼稚園でもありません。

「遊び」に反対したのは保護者だった

園から車で10分ほどの山間にある森を市内の建設会社から無償で借り「北清の森」と名付けて子どもたちの遊び場づくりをはじめました。これに反対したのは保護者でした。遊ばせるのではなく、勉強させてほしいという要望が多かったのです。幼児期の遊びの重要性を認識していた井内氏は、年単位の時間をかけて保護者の理解を得て



応援したのも保護者だった

一方で、左の写真のツリーハウスなど北清の森の整備をしたのも保護者でした。井内氏の理念に賛同した父親を中心とした保護者が森の整備をボランティアですめたのです。トイレやブランコ、パーベキュー小屋など、いまも進化中です。

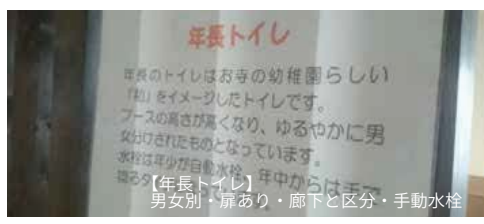
遊びが育む感性・主体性

恵庭幼稚園が「遊ぶ」にこだわるのは、子どもたちの豊かな感性と主体性を育むためです。あくまでも目的のための手段の1つに過ぎません。こどもの遊びは、幼児教育において今でも注目されている分野で、恵庭幼稚園の取り組みは先進事例です。

トイレのこだわり

校舎にも理念に基づいたこだわりが随所に見られます。トイレは、年少・年中・年長ですべてが違う造りです。

年少年中は男女共用で廊下と一体化した明るいトイレで、年長は男女別の落ち着いた和風。扉の有無や自動水栓か否かも



発達に応じた教室設計

教室も年少・年中・年長でことなります。園に慣れるために教室らしくしないつくりの年少。学校生活のルールを学ぶた

めにあえて、教室らしくつくりとした年中。そして、何をするかを園児が主体的に考えられるように目的別の空間を複数用意した年長。

ももとは一般的な教室しかなかった園舎を、毎年すこしずつリノベーションして現在のよう発達段階に応じた姿へ発達させました。

「〇〇していますか？」

園の教育方針の特長のもう1つは、許可制にしないことです。許可制とは、園児が教師に「〇〇していますか？」と聞いてから何かをすること。そうではなく、何をしたいのか自ら考えさせます。それが、年長の教室にも明確に反映されています。

明確な理念を

遊びや発達段階に応じた教室設計の背景には明確な教育理念があります。基本理念があり、その実現のために必要な施設を整備する。職員もその理念を踏まえて各自が行動するので、指導方針と園の設備が連動する。施設やカリキュラムといった外面の背後に明確な理念を持ち、それを共有することが重要なことです。

- 研修日時
平成28年11月7日(日) 9時30分～13時
- 研修先
恵庭幼稚園(井内聖学園)
- 参加者
会派清風(稲村勝俊・岡野喜代治・市川正・古谷陽一)
- 会派新風(山田明・山崎公司・後藤正洋・佐藤立)

協し地域におこし地域力デザインを

砂川市 まちなか集客施設 SuBACo

- ▽ ここがポイント!!
- ▽ 明確な目標設定と共有の重要性
- ▽ 嘱託職員として採用することの功罪
- ▽ まちなかに拠点をもちつこと
- ▽ 地域にデザイン力を!

地域おこし協力隊導入の経緯

砂川市は昭和33年に市制を施行しました。当時の人口は320000人弱。その後、家族を含めて1万人が暮らしていた化学肥料工場の規模縮小や、近隣産炭地域の衰退により人口減少が続ぎ、平成28年9月末には17,581人となりました。特に中心市街地の人口が大きく減少しました。

平成19年に5カ年の中心市街地活性化基本計画を策定し、様々な活性化策や市立病院の移転改築などによって中心市街地への流動確保に努めてきました。そして平成21年度に地域おこし協力隊制度が始まったことを受けて、平成25年からこの制度を活用してまちなか集客施設 SuBACo を開設しました。以前から構想があった商店街の情報発信施設の整備とそれぞれ要望が出ていた商工会議所・観光協会との事業パワーアップを目指して導入したものです。



まちなか集客施設 SuBACo

28年度には1期と入れ替わりに3期が着任しました。現在は、SuBACo担当4名と移住定住担当1名の計5名が砂川市で活動しています。

動いています。

勝手に作ったシヨップカード

28年度に着任した第3期の地域おこし協力隊が、市内店舗への流動を高めるためにシヨップカードを制作しました。シヨップカードは地域おこし協力隊に札幌市立大学でデザインを専攻した隊員が制作しました。各店舗に協力隊が出向き協力を依頼して作ったもので店側から依頼があったものではありません。制作に通常かかるデザイン費や取材費は協力隊が行ったため一切からず、印刷も協力隊の活動経費で市販の名刺用紙を利用したため、店側の負担は一切ありませんでした。



地域おこし協力隊が制作したシヨップカード



全ての店を訪問し、手作りした

共通デザインのシヨップカードは人気があります。協力隊が全ての店を訪問して作っているのをお店の案内もでき、

嘱託職員という地位の功罪

SuBACoを起点として一定の周遊効果生まれています。協力隊にデザインを学んだ方がいたことが大いに役立ちました。

地域おこし協力隊は、一般職(嘱託職員)としての雇用・特別職としての雇用・委託契約としての形態があります。それぞれの長所短所があり、多くの自治体では一般職の嘱託職員(任期1年・3年まで更新)として雇用しています。

嘱託職員の長所は、社会保険加入です。短所は通常の公務員と同様の制約をうけることです。特別による対応は可能ですが、通常は兼業が禁止されます。また、一人あたり最大200万交付税措置される活動経費が自治体の予算に組み込まれるため、予算を使った活動



砂川市役所での研修

をするには上司の決済が必要になります。兼業禁止については、3年の期間終了後に起業するためには任期中から自分の仕事を始めたほうがよりスムーズに起業できます。委託契約の場合、契約の組み方次第で兼業を認めることは容易です。一方で、協力隊は個人事業主となるので国民健康保険に加入する必要があります。

拠点はまちなかに

砂川市は一般職の嘱託職員として雇用していますので、社会保険など福利厚生は安定しています。活動が制約される場面も発生しています。協力隊導入の目的達成に最適な制度設計が必要です。

また、協力隊の活動拠点をどこに置くかもポイントです。砂川市ではまちなかのSuBACoに拠点を置いていますが、役場庁舎内に机を置くところも多くあります。柔軟な活動にはまちなかに拠点を設置することが大切です。

- 研修日時
平成28年11月7日(月) 15時〜17時
- 研修先
砂川市役所(飯澤明彦議長・山下克己商工労働観光課長ほか)
- まちなか集客施設のSuBACo(鈴木なつみ様ほか)

その他の研修先

- 参加者
会派清風(稲村勝俊・岡野喜代治・市川正・古谷陽一)
- 会派新風(山田明・山崎公司・後藤正洋・佐藤立)

道の駅の活用に関して、成功事例である砂川ハイウェイオアシスと課題事例として道の駅ハウスヤルビ奈井江の比較、地域資源の継続的発信という視点で三笠市立博物館を訪問しました。砂川ハイウェイオアシスとハウスヤルビ奈井江との比較からは、明確なコンセプトの設定と関係者全体での共有が重要であることを確認しました。また地域資源の発信を継続させるには、常に新たな角度からの再発見が不可欠で、地域おこし協力隊等を活用して地域を編集・デザインする力を確保することが必須です。

平成28年度 政務活動報告書

会派又は議員名 清風

政務活動期間	平成28年12月19日、12月20日(2日間)
政務活動先	厚真町、鹿部町、木古内町
政務活動参加者	稲村勝俊、市川 正、古谷陽一(清風) 山田 明、山崎公司、佐藤 立(新風)(6名)
政務活動項目	地域おこし協力隊について(ローカルベンチャースクール) 道の駅開業後に想定される課題について (道の駅しかべ間歇泉公園、道の駅みそぎの郷きこない)
政務活動項目に係る 目的・結果等の概要・所見	別紙のとおり

地域おこし協力隊を使いこなす町・厚真

厚真町・ローカルベンチャースクール

ここがポイント!!

- ▽ 制度に合わせるのではなく、制度を町の課題に合わせて使い切る。
- ▽ 若手職員が暴れられる環境を整える

地域おこし協力隊の優等生

厚真町は苫小牧から車で40分、新千歳空港から車で35分という好立地にあります。中核都市苫小牧市からの距離は、札幌から当別町への距離とほぼ同じ程度です。人口は昭和33年の10,597人をピークに減少が続き、現在は4,500人程度で、今後も減少が続くと見られています。水稲・ハスカップ・じゃがいも・放牧豚などの一次産業が特徴ですが、道内で利用者が一番多いサーフィンの町としても知られています。

当初は農業支援員として募集した地域おこし協力隊は、その後、観光・林業・特産品開発と範囲を拡大し、28年度は社会教育分野も加えました。

厚真町は、これまで

援の仕組みをスタートさせました。

雇用創出までは至らず

これまでの地域おこし協力隊について厚真町が課題と捉えた点は2点あります。

(1) 定住・起業につながっているか、町内の雇用拡大にはまだつながっていない。

厚真町ローカルベンチャースクール告知 (WEB から転載)



ない。

(2) 地域おこし協力隊の活動分野を設定しているが、それに収まらない人材を逃している。

また、地方創生という観点からは、近年の移住者の多くは苫小牧市内で働いていて町内に雇用の場が少ないことは大きな課題です。

そこで、「地域を舞台にして価値を創造に挑戦す



厚真町役場にて宮主査による説明

キーマンの存在

ローカルベンチャースクールは、岡山県西粟倉村で生まれたプロジェクトです。西粟倉村について全国二番目の展開が厚真町でした。なぜそのような動きが厚真町で起きたのか。

その背景には一人の職員(キーマン)がいます。産業経済商工課観光林業水産グループの宮主査です。中途採用で厚真町職員となった宮主査が、西粟倉村の取り組みを講演



ローカルベンチャーの様子 (WEB から転載)

で聞き厚真町での導入に繋がったのです。

若手を活かす組織

その背景にはもう一つ厚真町役場の特長があります。若手職員のやる気を組織の推進力に変える仕組みです。町長・副町長以下管理職が若手職員の自由な発想を応援しています。

新たな取組を始めるときは、手を上げた職員でプロジェクトチームをつくり、併任として発令します。これによって業務として取り組むことができるようになります。必要な出張旅費も予算計上しています。

は、砂川市のまちなか集客施設SUBOの研修報告でも若干ふれました。

地域おこし協力隊が機能しない要因としては、一般職として採用することによる兼業禁止・行政の無理解・庁舎内での勤務など種々ありますが、最大の要因は、業務内容が不明確な点です。多くの自治体は活動分野を限定して募集していますが、

分野の限定だけでは、協力隊が何をすべきかを定義できません。さらに、厚真町でおきたように中にはまらない魅力的な人材を逃してしまう懸念もあります。

今回の厚真町の取り組みは分野の制約を外す一方で、明確な目的をもつ起業希望者のベシックインカムとして地域おこし協力隊を活用するという、これまでの課題を踏まえた新たな取組です。

地域おこし協力隊の落とし穴

地域おこし協力隊は、地方の自治体にとって大きな可能性を持つ制度です。しかし、人件費がかからない事務補助員扱いをしたり、熱意ある方を採用したものの何もやらせていないところなど、有効活用していない事例が多くあります。この点



厚真町役場にて

- 研修日時
平成28年12月19日(月) 9時30分〜10時30分
- 研修先
厚真町役場(近藤泰行副町長ほか)
- 参加者
会派清風(稲村勝俊・市川正・古谷陽二)
会派新風(山田明・山崎公司・佐藤立)

道の駅の成否を分ける工夫

鹿部町 道の駅しかべ間歇泉公園 木古内町 道の駅みそぎの郷きこない

ここがポイント!!

- ▽ 担当者を配置することが推進力をうむ
- ▽ 修行3年!道の駅コンシェルジュ
- ▽ 一人勝ちで満足しては継続しない

道南に2つの道の駅開業

平成28年、道南に2つの道の駅が開業しました。鹿部町の「道の駅しかべ間歇泉公園」と木古内町の「道の駅みそぎの郷きこない」です。しかべ間歇泉公園は既存のしかべ間歇泉公園をリニューアルして3月に開業しました。みそぎの郷きこないは、北海道新幹線木古内駅に隣接する道の駅で1月に開業しました。

浜のかあさんが人気集める

道の駅しかべ間歇泉公園は、鹿部町の第5次総合計画（平成25～34年）と平成23年に策定されたしかべ観光のグラウンドデザインを基礎として平成26年からしかべ間歇泉公園周辺整備事業として整備が進められてきました。しかべ間歇泉公園は平成には9万人を超えていた入場者が平成27年には5万人弱にまで減少していて、この

の駅開業まで、そして開業後の想定される課題について研修しました。

3月の開業以来、間歇泉公園のみで営業している



道の駅しかべ間歇泉公園 浜のかあさん食堂

た昨年度と比べて70%入場者が増加しています。

また、道の駅に設置された浜のかあさん食堂が1日平均43,000円強の売上と人気を集めています。地元の方とのふれあいの機会となっていることも人気の要素です。昼間それほど忙しくない漁師のおかあさんたちが交代制で出動しています。

旅行代理店への営業は町が

しかべ間歇泉公園では、マレーシアなど海外からの観光客を含め団体ツアーの利用が特に増えています。これは、リニューアルの影響とともに、町の担当者が旅行代理店に積極的に営業を行った成果でもあります。



しかべ間歇泉公園での研修

7つのコースを用意している体験型ツアーは、

地域おこし協力隊1名をコーディネーターとして配置して商品開発と調整にあたっています。

担当者は不可欠

団体ツアーの呼び込み体験型ツアーの開発以外にも道の駅店舗担当と別に担当者を配置しています。道の駅を含め国内の観光は激しい競争にさらされていますので、専任の担当者を配置してプロモーションに取り組む必要が高いことが改めて確認できました。

担当者の設置は白馬高校魅力化プロジェクトでも見られた現象で、事業を推進するために必要不可欠な要素であると考えられます。特に管理職が兼任するのではなく、係員であつても専任担当者を配置することが大きなポイントです。

道の駅コンシェルジュは開業3年前に着任した

28年1月に開業した道の駅みそぎの郷きこないの最大の特長は、観光案内を担うコンシェルジュ2名です。関東からの移住した1名とUターン1名の計2名がコンシェルジュとして勤務しています。

この2名が木古内町で

働き始めたのは道の駅開業の3年前でした。道の駅開業後はコンシェルジュとなることを前提に地域おこし協力隊として着任したのです。3年間の仕事は、「周辺9町のことなら何でも知っている人」になるための修行でした。

道の駅みそぎの郷きこないは北海道新幹線の開業にあわせて、渡島西部・檜山南部9町の広域観光拠点として整備されました。運営態勢は木古内町を中心に構成されていますが、9町による新幹線木古内駅活用推進協議会から年間50万円の業務委託費が支払われています。観光コンシェルジュはこの9町のことをすべて案内できなければいけません。そこで、地域おこ



みそぎの郷きこない 周辺の観光案内が集まる棚

町が主体であっても町内のことだけを考えていると、地域縦割りの利便性が低い施設となってしまう。

町が主体であっても町内のことだけを考えていると、地域縦割りの利便性が低い施設となってしまう。

一人勝ちを目指さない

道の駅は単なる商業施設ではなく地域の産業振興のための公益的な役割も担っています。そこで重要なのは、一人勝ちを目指さない・一人勝ちで満足しない経営理念を明確に定めることです。町

- 研修先
道の駅しかべ間歇泉公園（中居敏夫店長ほか）
平成28年12月19日（月）15時～16時
- 研修先
道の駅みそぎの郷きこない（一般社団法人木古内公益振興社 北島孝雄代表理事ほか）
平成28年12月20日（火）10時～11時
- 参加者
会派清風（稲村勝俊・市川正・古谷陽一）
会派新風（山田明・山崎公司・佐藤立）